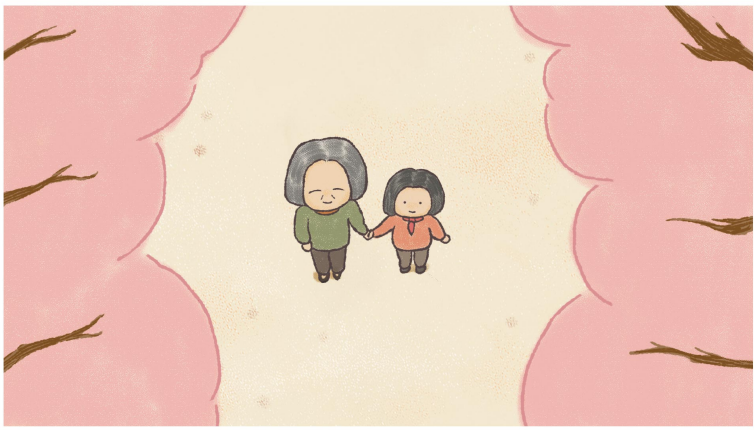
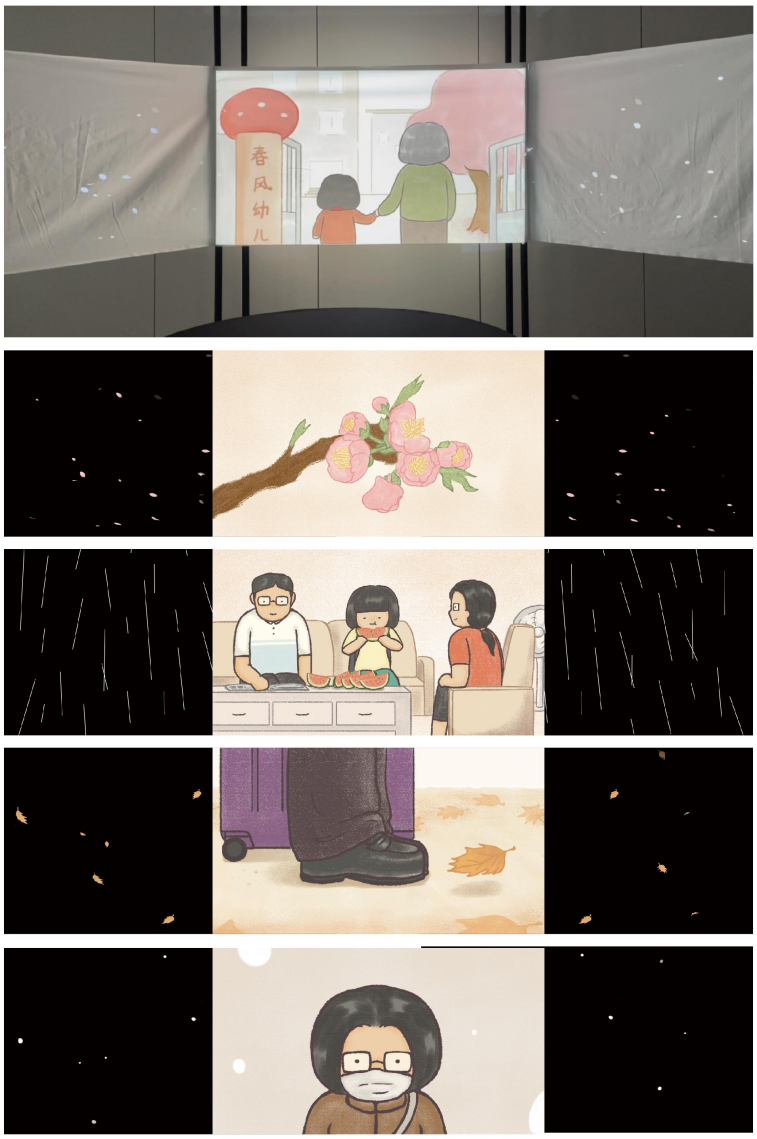
周　昕蓉
Zhou Xinrong



四季折々

アニメーション、映像、投影



四季の移ろいから感じる「もののあはれ」

私は「もののあはれ」の表現を研究し、アニメーションを通して「もののあはれ」を感じさせたいと思い制作してきた。

コロナ禍が始まった最初の春に、しばらく家から出ていなかった期間を経て、家から出ると、近所に満開の桜を目にした。その一瞬の美しさに魅せられ、そしてその美しさはコロナ禍が原因で多くの人に見られないまま消えてしまうと気づき、哀愁を感じた。これは私が初めて「もののあはれ」を強く感じた瞬間だった。

昔、本などを通じて日本の「もののあはれ」の概念とそれにまつわる風習、例えば春に桜、秋に紅葉、夜空に輝く月を見る、などを知った。人生の機微や、四季の自然の移ろいなどに触れた時に感じた瞬間的に湧き上がる感情、優美で繊細なしみじみとした情趣を意味する「もののあはれ」は、コロナ禍に影響された今の時代では、さらに深く人の心を響くと実感した。外に出られないため四季の瞬間的な美しさを見逃す時や、故郷に戻れないため、久々にビデオ通話をする時に、ふと親の顔が老けていると感じた瞬間など、私は常にこのような失ってから気づくことから「もののあはれ」を感じる。なので、作品を通して自分が感じる「もののあはれ」の思いを人々に伝え、共鳴させようと考え、今の時代にこそ強く感じられる「もののあはれ」をテーマにした。

修了制作では、日本の和歌や伝統絵画を参考にし、物語を作った。四季の移ろいの美しさに、人生の喜びや哀感を託して和歌を詠み、或いは四季の移ろいを代表する風物をそのまま絵画の意匠にして描き、「もののあはれ」を表した作品が研究中で多く見られた。よって、四季の移ろいへの描写を物語に入れた。そして、それぞれの季節には、主人公の人生において幼少期から青年期までの四つの段階を描いて、物語にした。四季の移ろいにつれ、主人公は徐々に家族から離れ、少しずつ家族が老けていく姿を見届ける。季節と年齢という瞬間的な、すぐに失われていくことを描写することで、「もののあはれ」の美しさ、しみじみとした感情を少しでも感じさせればと考え、制作した。